

たらの芽

2022. 2. 22

もう30年以上も前の話になる。村の小学校に新任教員として登場した私であった。毎日が必死ではあったが、苦しくはなかった。何だか楽しかった。

すぐに家庭訪問の時期がやってきた。子どもたちは、みんなニコニコである。「先生、何時頃、来るの?」「うちはね。〇〇を通過して、〇〇の隣だよ」「先生、俺が道案内をするから」矢継ぎ早に話してくる。自分の家に「先生」が来るのが、どれほどうれしいのか。

慣れない道を慎重に家を探しながら進むと、必ず子どもが立っていた。そこからは誘導してもらえた。楽しみにしていたわりには、部屋に隠れてしまう子ども、親御さんの隣にきちんと正座している子ども、自宅の庭で遊びながらも、こちらを気にしている子ども、訪問する家庭によって、それぞれである。

どのご家庭でも、お茶にコーヒー、お菓子にケーキと出していただき、恐縮してしまったことを覚えている。最も印象に残っているのが、たらの芽の天ぷらである。家庭訪問で天ぷらが出てきたのである。あの頃の私は、たらの芽と言われてもよくわかってはいなかった。たらの芽を知ったのは、もっと後になってからである。

どのご家庭に行っても、包まれているような温かさを感じた。何だか守っていただいているような感覚である。目の前に座っているのは、頼りない若者である。あれこれと心配なことばかりのはずである。そのことを出さずに、相手をしていただいた。今、振り返っても感謝しかない。

今の新任教員は、家庭訪問で、どのような“扱い”を受けているのだろうか。きっと、温かさまでは感じてはいないのではなかろうか。時代が変わってきたと言えそうだが、学校すなわち教員への要求水準が上がり、学校と家庭とのハードルも低くなっているのかもしれない。それ自体は、わるいことだとは思わない。それだけ、期待されているとも言える。

昔は、保護者に守られ、保護者に育てていただいた側面がある。一人の若者を見守ってくれる雰囲気があった。今は、なかなかそうはいかないだろう。そう考えると、保護者に育てていただき、先輩教員に多くことを教えていただくことができた私は幸せな教員の一人なのだろう。

家庭訪問では、たらの芽の天ぷらを口にすることはできなかった。そんな勇気はなかった。後になって、それを味わう機会があり、こんなにもおいしいものだったのかと知ることができた。今年も、まもなく、たらの芽の季節がやってくる。たらの芽を見たり食べたりするたびに、新任教員時代を思い出し、温かく育てていただいた村の保護者の皆さんの顔が浮かんでくるのである。